

花き

実況

1 キク

奥越地区の秋植え夏ギクでは、3月16日現在まで、長期間の雪に覆われる状態が殆どなく、昨年よりも積雪が少ない(昨年:3月13日調査で平地の畝に積雪が殆ど見られない)。不織布の被覆は3月上旬に行われたが、これまでの温暖な気象条件から、被覆している農家は全体の半分程度である。

秋植えキクの草丈は「あかね」で4.9 cm(昨年:5~7 cm)、秋植えピンチ栽培の「小鈴」で3.6 cm(昨年:2~4 cm)でほぼ昨年並み、例年と比べると4月上中旬並みの生育となっている。なお、芽立ち数は昨年より多い。

春植えギクでは、挿し芽用の芽の生育が旺盛で、採穂が3月中旬から開始されている(昨年:3月30日前後)。

病害虫として、ネキリムシの被害が見られる。

あわら市ではハウス内に定植した秋植えキク(清風等)は、トンネル無しでも草丈が15~20 cmと伸びが早い。露地の秋植えのものは、元株の除去中である。ハウス内の夏秋ギクについては、順次親株から採穂が行われている。

病害虫として、ハウスの親株等にアザミウマ類、アブラムシ類、白さび病が部分的に少発生している。

福井地区では、盆ギクの親株管理が行われている。生育は全体に早まっている。

病害虫として、一部でアブラムシが少発生している(3月17日調査)。

丹生地区では、盆ギクの親株管理が行われている。

病害虫として、古い葉にアザミウマ類による黄白色の食害症状が見られたが、新葉には見られなかった(3月13日調査)。

南越地区(越前市)では、盆ギクの親株管理が行われている。

病害虫として、一物品種の中位葉以下に、黒斑・褐斑病が多発していた(3月16日調査)。

二州地区では盆ギクの親株管理が行われている。

病害虫の発生は確認されていない。

若狭地区では盆ギクの親株管理が行われている。

病害虫の発生は確認されていない。



写真1 挿し芽作業

2 スイセン

2月上旬の出荷終了後から、シカ・イノシシがスイセン圃場に侵入し、食害・掘り起こし等の被害が大きくなっている。獣害対策として、メッシュ柵・ネット柵・電気柵を設置し、適正な管理を行っている圃場では効果が高い。次年度以降に防止柵の一層の推進を行う予定である。

2月28日には、令和元年度第3回文化的景観保存活用計画策定委員会が開催された。福井市、越前町、南越前町が連携し、令和2年度に「越前海岸の水仙畑と農村景観」として、重要文化的景観の選定を目指している。



写真2 メッシュ柵設置による獣害の軽減
外側（A）はシカが食害、内側（B）は食害なし
（R2.3.5 越前町血ヶ平）

3 トルコギキョウ

あわら市では、抑制栽培の切下株の芽の整理が3月上旬に行われた。

普通栽培（3～4月定植）は圃場の準備が行われている。一部では固化培地での若苗（本葉1対展開程度、本葉長5mmくらい）を25×25cm、2条植えもしくは粗植で、黒色有孔マルチに定植されている。

南越地区（越前市）では、9月中旬播種、11月中旬定植の作型（「ボヤージュグリーン」、「フルフル」等）で、ビニールトンネルの被覆が終了している。草丈は20cm程度で展開葉は7対程度（昨年：草丈11cm程度で9対程度）であった。

二度切り栽培では、草丈5cm、分枝数は2本程度（昨年：草丈3cm、分枝数は2本程度）であった。

病害虫は特に発生していない。

4 ストック

あわら地区では、ストック部会として12月20日頃から本格出荷、2月15日でお荷は終了した。暖冬で開花がそろっていた。

病害虫は特に発生していない。

南越地区（越前市）では、「カルテット」シリーズが栽培されている。3月16日の調査（昨年：3月16日）では、8月20日～8月末に播種された株で収穫が終了した（昨年：8月20日～8月末播種で収穫終了）。9月10日頃に播種された株では4割程度（昨年：9割程度）収穫が終了した。昨年より収穫は遅くなっている。

病虫害は特に発生していない。

二州地区では、出荷が全て終了した。

若狭地区では、アイアンシリーズが栽培されている。10月中旬播種の作型で、6割程度収穫が終了した。(3月17日調査)。

5 その他

あわら市の促成ヒマワリの播種が順次行われ、2月下旬に播種した個体で、本葉2対目(葉長3cm程度)が出ている状態である。

露地のシンテツポウユリの据え置き栽培では、芽の整理を行っている。

アスターの電照促成栽培(ハウス内3月下旬定植)は圃場準備中である。

対策

1 キクのハモグリバエ類とカブラヤガの防除

- (1) ナモグリバエは4～5月にキクの暮れ植え栽培の株や、葉肉の厚い品種に発生するため、薬剤防除を予防的に行なう。例年被害が目立つ品種は、オルトラン粒剤（ハモグリバエ類に登録有）、スタークル顆粒水和剤（ハモグリバエ類に登録有）等を用いて、前もって防除する。
- (2) 5月まではナモグリバエ、6月以降にマメハモグリバエが発生し優占種が変わるため、多くの種に効果がある薬剤を選定する。特に4月が温暖な場合、ナモグリバエの発生が多い可能性がある。浸透移行性のあるダントツ水溶剤（ナモグリバエ、ハモグリバエ類登録有）、アクタラ顆粒水溶剤（ハモグリバエ類）、ジェイエース水溶剤（マメハモグリバエ）を組み合わせる。
- (3) ハモグリバエ類の幼虫が入った葉は二次発生と黒斑病や他病害の原因となるため、下葉かきをかねて除去する。被害がひどい場合は、落とした下葉も圃場から除去する（ナモグリバエは葉中で蛹になるため）。
- (4) 新芽が食害により倒れる場合はカブラヤガの存在が疑われる。捕殺するかカルホス微粒剤Fを地際に処理する。基本的に接触毒であるため、植物の株元処理か、幼虫が触れやすいように軽く混和する。

2 キクの挿し芽作業

- (1) 採穂の1～2日前に親株の病虫害防除を徹底する。芽の伸長初期には、保護殺菌剤、有機リン剤等の散布により、アザミウマ類や白さび病防除を徹底する。
- (2) 採穂時間はしおれやすいため、早朝に取るのがよいが、極端に露が多い時間帯は避ける。
- (3) 摘心した親株から採穂する。極端に太く生長したものからは採穂しない。挿し穂は手で摘み取り、展開葉3～4枚をつけ、長さ5～7cmに調整する（写真2）。
- (4) 挿し穂は冷蔵すると挿し芽後の生育がそろい、エスレル10の効果も向上する。冷蔵する場合は、発泡スチロールの箱に、挿し穂の切り口を下にして1列に並べて詰め込み、5℃の冷蔵庫に7～10日、2℃で2週間まで冷蔵できる。
- (5) 軽い挿し芽用土は作業性がよいため、パーライト5+クンタン5、バーミキュライト5+ピートモス5等を用いる。
- (6) 土詰め後の用土は十分に吸水させておき、はし等で深さ2cmくらいの挿し穴をあけるようにする。
- (7) 挿し芽間隔は葉と葉がわずかに触れ合う程度とする。間が空きすぎると活着が遅れる。挿し芽後十分にかん水し、挿し穴が塞がれるようにしておく。遮光下の暖かい棚上に置き、10日目以降少しずつ遮光をはがしてゆく。温床上では14日、無温床では20日で発根苗ができる。



写真2 採取した挿し穂

3 トルコギキョウの管理

- (1) 定植後は、活着と初期生育を促進させるため、根が張るまで十分に灌水する。特に、花のボリュームを出すため、花芽分化が始まる本葉8対（草丈が15～20cm）頃までは水分や肥料

を十分に与える。二度切り栽培は、草丈が10～20cmに達した時点で、生育が良い枝を2本程度残してその他の枝を取り除く。多く枝を残すと、花のボリュームが出ない上、ネットと枝が邪魔で収穫がしにくい。

上葉が小さくなるうらごけがみられる場合は、圃場排水に努め、生育状況をみながら、液肥を施肥する。葉先枯れが出やすい品種はカルシウム入り液肥の葉面散布を行うとよい。

- (2) 春植えは、活着後の生育の状態を見ながら液肥(OKF-1の500～1000倍など)を中心に追肥する。
- (3) 定植後に生育が停滞し、葉が淡黄色になって枯れる場合がある。これは主に塩類濃度(最適な塩類濃度EC=0.3～0.5 mS)が1.0 mS/cm以上と高い場合に発生する障害の可能性があるため、圃場準備の際には土壌分析を行い、施肥量を調節する。また、ECの値が高い場合は、定植前に水をかけ流したり、床の表土を削り落としたりして、塩類を除去する。
- (4) 土壌酸度が低い時も同様な障害が発生する。pHは6.5前後がよく、酸性土壌ではマンガン過剰の症状、上位葉先端や周縁部に黄白斑点、新芽の萎縮が見られる。1 m²あたり深さ10 cmの土壌のpHを1上げるのに必要な石灰資材は粘質土で120 g、砂質土で80 gとされる。そこで、対策としては薄い石灰水(消石灰等の石灰資材を水10リットルあたり100 g溶かしたもの)10リットルを3 m²に土壌施用する。効果が不十分であれば再度施す。
- (5) 立枯病はフザリウム菌とピシウム菌によるものが主である。フザリウムの病斑は灰白色粉状のかびが密生する。耕種的防除として過湿を防ぎ丈夫に育て、発病株は、拔取り焼却する。
- (6) 葉先枯れ対策には、日中の換気を十分行い、軟弱徒長にならないように管理する。雨や曇天が続いたあとの好天で発生しやすいため、雨や曇天の日は、扇風機や暖房機の通風運転で施設内の空気を常時動かすようにする。また、降雨によるハウスサイドからの雨滴で灰色かび病や立枯れの発生が助長されるので注意する。

4 ヒマワリの播種と育苗管理

- (1) 天幅 90 cm の 50 m 畝では約 2500～3000 本の苗が植わるので、種子量は 5 dl(約 4000 粒)必要である。
- (2) 200 穴のセルトレイに播種する。種子は横向きに並べ、種子が隠れる程度に覆土する。覆土後は新聞紙で覆い、十分灌水する。
- (3) 発芽温度は、20 °C以上(発芽適温 26 °C)を確保する。低温で発芽揃いが悪くなると、その後の生育にも影響する。放射冷却で低温になる時は不織布をベタガケする。
- (4) 3～4 日で発芽が始まるので、新聞紙を取る。発芽時に子葉についている種皮が取れないようであれば手で取り除く。
- (5) 若苗定植が原則なので、最初の本葉が展開した頃(播種 10 日後)に遅れないよう定植する。
- (6) 早生品種は 4 月下旬播種で 6 月中旬に開花する。「サマーサンリッチパイン」「マンゴー」「オレンジ」の順に開花する

5 スイセンの春以降の管理

- (1) コンテナ栽培のスイセンはハウスの外に出し、朝日が当り、夕日が当たらない半日日陰の場所に移す。ハウス栽培のスイセンは気温が20 °C程度に管理できるように、日中はハウスを開放する。できるだけ葉を成長させて、切り下球の肥大を図る。
灌水は適宜行い、土壌が湿っているように管理する。極端な乾湿は避ける。

- (2) 5月下旬までは十分に光合成をさせて、球根の肥大を促進する。
- (3) 6月上旬ぐらいに地上部が3分の2程度枯れたら、掘り上げ準備を行う。その時に残った茎をつけたまま掘り上げ、風通しの良い日陰で乾燥させる。